

タブレット地域紙「市民プレス」第58号（2012/10/5発行）の電子版として再編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

目次

-PAGE 2	かいじろうの詩画 リンゴとヴァイオリン
-PAGE 3	秋 栗の実 武蔵野のまち
-PAGE 5	江戸氏のまちづくり 三百余年！
-PAGE 37	PCの展開1／3世紀を語る
-PAGE 49	地域のニュース&ギャラリ―

かいじろうの詩画

リンゴとヴァイオリン 1957

かいじろう 画



原貝次郎（本名原武^{たけし}）

1932年（昭和7年）志木市で薬局を営む商家に生まれる。
県立川越高校在学の頃美術、音楽に興味を持ち始め、同校卒業後、東京薬科大学に進んだ頃から油絵、詩に傾倒する。1952年（昭和28年）20歳の夏休みに結核を患って入院。同大を中退し、その後二科会会員齊藤三郎氏に師事して絵筆をふるう。1961年再び倒れて入院。1962年1月7日払暁永眠。行年29才。

秋

かいじろう

秋になると 空はひろびろとする
ぼくの心も ひろびろとする

秋になると 空は深く透んでいる
あなたの愛も ぼくの愛も 深く透んでいる

紅葉に彩られた木々の枝々に
秋の空はみつめられている

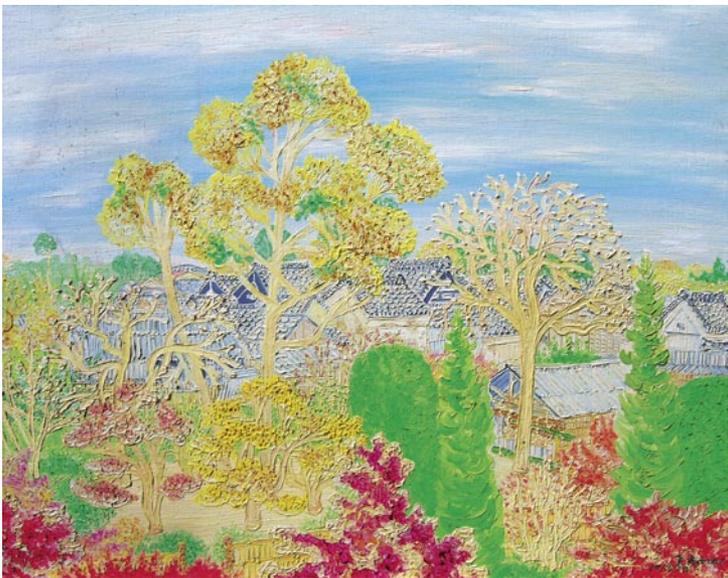
あなたの愛も ぼくの愛も
どこかでだれも知らない瞳がみつめている

ほらごらん！ 遠くをごらん！
ゆつたりと幸福の山々が眠っている

静かに足音を残して 飛んでゆくのはどなた？
高い青空に消えてゆくのはどなた？

秋になると 空は大きくなる
ぼくの心も 大きくなる

秋になると 空は腕なをさしのべて
あなたの愛も ぼくの愛も抱かれる



武蔵野のまち 1956

かいじろう画



栗の実 1958

江戸氏のまちづくり 二百余年！

1. 「江戸」のまちづくりは・・・

桓武平氏の流れを汲む秩父党の一族によって始められた。平安時代後期のことである。武蔵国秩父地方から出て、河越（現・川越市）を拠点とした河越氏は、上戸（現・川越市上戸・鯉井地区）の台地に莊園を開いた。永暦元年（1160）のころと伝えられる。

国指定史跡「河越館跡地」の大規模な発掘・調査の結果、当時の規模や景観を推定することが可能となった。誠に幸いなことといわざるを得ない（本紙53号参照）。

秩父氏の嫡流だった河越氏

河越重頼は、それに先立つ保元の乱で、源義朝に従って上洛したことが『保元物語』に記されているが、「高家」（格式の高い名門）の一人としてその名を残した。

江戸に進出した江戸氏

秩父氏一統はさらに入間川（現荒川）沿いに平野部へと進出し、秩父重綱の四男重継は、

武蔵国「江戸郷」を相続して街づくりを始めた。

彼は「江戸」の地名をとって江戸四郎と称し、江戸氏を興して桜田郷の高台（現・麴町台地）に居館を構えた。その場所は、後の本丸・二ノ丸辺りではないか、と推定される。しかし、残念なことに、

江戸館の遺構は皆無である

中世の豪族の居館は、平常でも防禦の構えをもち、戦闘のための城を兼ねていたので、城館ともいわれる。したがって居館を営むためには、要害の地を選ばねばならなかった。

現・皇居が占めている台地は標高がもつとも高く、台地の北東に沿って平川が流れ、南側には赤坂の溜池がある谷地を控えて、天然の要害をなしていたので、選ばれたのである。重継の嫡男、重長は江戸郷の豪族として君臨したが、その後太田道灌の築城、つづく徳川家康の大規模な改造によって、江戸氏の館は全く消滅してしまった。

2. 草深い原野だった・・・

江戸は、武蔵国と下総国の国境を流れる河川の西に位置し、低湿地帯には葦や萩の生い茂る原野だった。

この光景を詠んだ奈良時代の和歌に、

武蔵野は月の入るべき山もなし 草より出でて草にこそ入れ

(『万葉集』)

武蔵野台地は西から東へ

五つの台地、上野、本郷、麴町、麻布、品川台から成り立ち、それらの間には谷や沼があつて、流れる川は湊に注いでいた。海は遠浅で波は静か、海中の海苔をとるために、竹で編んだ「ヒビ」が使われたので、それが「日比谷」の地名になつたともいわれている。

入口には大きな中州があつて江戸前島と呼ばれ、入江に流れ込む平川



の流域には人々が住みついていた。平安時代の終りころ、付近一帯を支配していた坂東武者の棟梁、江戸氏は、高台に館を建てたのである。その向こうには果てしない眺めが開けていたに違いない。

WEBにエッセイを誌した方がいるので、耳を傾けてみよう。史実からは離れたフィクションであることを承知の上で……

『……はるかに遠く、入り江はきらきらと陽に輝き、緑の江戸前島には放牧された馬が遊ぶ。大海原から吹き上げる涼風は高台に在る館を通り抜けてゆく。向こうの小島に見える館が葛西清重の館だろうか、一里くらい先の左岸にはお堂が建ち、回りに集落が見える。あれは観音様を祀る浅草寺かな、その先には石浜の湊がある。ここは江戸前島に囲まれた入り江の小高い丘の上、日比谷入り江は波静かな良い湊で、丘の脇を平川が流れて入り江に注ぐ。

江戸重継は、上野の高台に大きな勢力を持つ、関道閑の娘を娶り、縁戚関係を結んでその力を盤石のものにした。母も、武勇の誉れも高い武蔵七党の雄、横山党の娘、横山党は小野牧の別当で多摩川の南、八王子から川崎までも勢力下に置いた武家集団なのだ。そして重長が生れた、我々親子にとつての願いは、石浜の湊を自分の勢力下に置くことだ。そのために近くの豪族と姻戚関係を結び、浅草寺とその周

辺を支配する松前一族と交渉を続けた。松前氏は浅草寺の建立者でもある。……』

『江戸』の地名は……

『吾妻鏡』にはじめて誌されたので、平安時代後半に発生したものと考えられ、その由来には諸説があるが、江は川あるいは入江、戸は入口を意味するので、「江の入り口」という考え方がもつとも自然である。

3. 『吾妻鏡』はもつとも重要な史料……

ここで、鎌倉時代研究の基本史料となっている『吾妻鏡』（『東鑑』（あずまかがみ、あづまかがみ）とも）について触れておく。

この書は、鎌倉幕府の初代将軍・源頼朝から六代将軍・宗尊親王までの將軍記という構成で、治承四年（1180）から文永三年（1266）まで、幕府の事績が編年体で記されている。

成立したのは鎌倉時代末の頃で、編纂者は幕府中枢と見られ、当時の実力者であった北条得宗家の側からの記述である。当時まで残っていた記録、伝承などから編纂したものの

ようだ。

なお同時代に、都の公家が記した日記も残され、鎌倉時代に成立したと思われる軍記物語として、平家の栄華と没落を描いた『平家物語』があり、それらとの照合は、歴史を紐解くために役立つている。

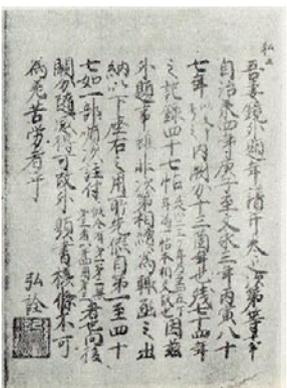
4. 江戸氏が歴史に現われたのは……

江戸重長の時代になってから

重長は、秩父氏一統、重継の長男で、正史に登場したのは、治承四年（1180）、武家政権を樹立した源頼朝が、相模国で敗れて安房・房総にわたり、再起して鎌倉に向かったときのことになる。

隅田川を渡河しようとした源氏、頼朝は、それまで平家に与していた重長を、ついには源氏の配下にしてしまう。平氏から源氏へ、変節によるまさに劇的な登場である。そのドラマをつぎに詳しく紹介することにしよう。

治承四年八月十七日に遡る……



『吾妻鏡』（吉川本）右田弘詮の序文

源頼朝が拳兵したとき、第一に攻撃目標としたのは、伊豆国目代山木兼隆であった。頼朝の岳父に当る北条時政らは、葦山あしやまにあった兼隆の屋敷を襲撃して彼を討ち取ったのである。しかし、三百騎を率いて、相模国土肥郷（神奈川県湯河原町）に進出した頼朝に対して、大庭景親は、熊谷直実ら平氏方の三千余騎を集め、石橋山（神奈川県小田原市）で対峙した。二十三日、三浦半島の一角（現・葉山市、横須賀市）を占めていた三浦一族の軍勢が、頼朝と合流すべく迫っているのを知った景親は、大雨の上ですでに日が暮れているにもかかわらず攻撃をしかけた。数に勝る大庭勢は圧勝し、寡兵の頼朝軍は壊滅して山中へ逃げ込んだ（石橋山の戦い）。

三浦氏との争い

源氏方に付いた三浦氏は、その前日、二十二日に三浦を出発したが、大雨のため頼朝軍と合流出来ず、翌日、頼朝軍が敗北したので、三浦に引き返した。一方平家方の武将であった畠山重忠は、二十三日夜、金江河（現・平塚市花水川）に陣をとり、二十四日には相模国、由井の浦（鎌倉市由比ヶ浜）で三浦氏と遭遇、合戦となり、『源平盛衰記』によれば、三浦は小坪（現・逗子市）の峠に三百騎、畠山は稲瀬川の辺りに五百騎で対陣したという。しかし重忠は郎従五十名余りの首を取られて退却、一方三浦氏側も死者を出しながら、ようやく

く本拠地に辿り着いた（小坪合戦、または小壺坂合戦）。

二十六日、重忠は同じ秩父氏の総領家である河越重頼に加勢を呼びかけ、重頼は同族の江戸重長と共に数千騎の武士団を率いて重忠軍に合流、三浦氏の本拠地である衣笠城（現・横須賀市衣笠町辺り）が大手、大善寺辺りが本丸を攻撃する。

そのころ河越氏は、「河越館」（現・川越市の北、上戸地区に所在）を居館として、秩父党の総領家が代々受け継いできた「武蔵国留守所総檢校職」にあり、武蔵国の軍事統率権をもつ最大勢力であった。

秩父氏軍によって衣笠城は落ちた・・・

先日の合戦で消耗した三浦氏は、夜になって衣笠城を放棄、脱出して頼朝軍と合流するため安房国へ向かった。二十七日、衣笠城は秩父軍によって攻め落とされた。落城したとき、八十九才の老齢であった三浦一門の当主三浦義明は城に残り、外孫である重忠らによって討たれた。『吾妻鏡』によると義明は「我は源氏累代の家人として、その再興のときに巡り会うことができた。今は老いた命を頼朝に捧げ、子孫の手柄としたい」として、壮絶な最期を遂げたという。一方、『延慶本平家物語』では三浦氏の軍勢が城を脱出するさい、義明が足手まといとなつたので置き去りにしたとされている。

先の合戦で消耗した三浦氏は、夜になってついに衣笠城を放棄、脱出して頼朝軍と合流するために安房国へ向かった。

『吾妻鏡』巻の一から・・・

治承四年八月小廿六日丙午。武藏國畠山次郎重忠。且爲報平氏重恩。且爲雪由比浦會稽。欲襲三浦之輩。仍相具當國黨々。可來會之由。觸遣河越太郎重頼。是重頼於秩父家。雖爲次男流。相繼家督。依從彼黨等。及此儀云々。江戸太郎重長同与之。

〔読み下し〕治承四年八月小廿六日 丙午。武藏國畠山次郎重忠は、且は平氏の重恩に報はん爲、且は由比浦の會稽を雪がん爲、三浦之輩を襲はんと欲す。仍て當國黨々を相具し來り會う可し之由、川越太郎重頼に觸れ遣はす。是重頼に於ては秩父家の次男の流を爲すと雖も、家督を相繼ぎ、彼の黨等を縦えるに依て、此の儀に及ぶと云々。江戸太郎重長同じく之に与す。

〔大意〕治承四年八月廿六日。武藏國畠山次郎重忠は、一つは平家の恩に応えるため、一つは由比ガ浜の合戦の屈辱を拭うため、源氏方の三浦軍を襲おうとして、武藏國の一族を連れて来るように、川越重頼に連絡した。重頼は秩父家の次男の系統ではあるが、嫡流

として、「武蔵検校職」という職権をもち、秩父党や武蔵七党等を従わせることができるので、河越氏に頼むこととしたが、一門の江戸重長にも協力を依頼した。

今日卯尅。此事風聞于三浦之間。一族悉以引籠于當所衣笠城。各張陣。東木戸口〔大手〕。次郎義澄。十郎義連。西木戸。和田太郎義盛。金田大夫頼次。中陣。長江太郎義景。大多和三郎義久等也。及辰尅。河越太郎重頼。中山次郎重實。江戸太郎重長。金子。村山輩已下數千騎攻來。義澄等雖相戰。昨〔由比戰〕今兩日合戰。力疲矢盡。

臨半更捨城逃去。欲相具義明。々々云。吾爲源家累代家人。幸逢于其貴種再興之秋也。盍喜之哉。所保已八旬有余也。計餘算不幾。今投老命於武備。欲募子孫之勳功。汝等急退去兮。可奉尋彼存亡。吾獨殘留于城郭。摸多軍之勢。令見重頼云々。義澄以下涕泣雖失度。任命愁以離散訖。

〔大意〕今日午前六時頃、三浦に噂さが伝わってきたので、一族全員が衣笠城に籠って、それぞれ陣營を張った。東の木戸の大手口は、総領の三浦次郎義澄と三浦十郎義連。西木戸は和田太郎義盛、金田大夫頼次。中陣は長柄太郎義景と太多和三郎義久たちであった。午前八時頃になって、川越太郎重頼、中山次郎重実、江戸太郎重長や金子氏、村山氏など、数千騎が攻めてきた。義澄たちも戦ったが、昨日の由比と今日の戦との二日にわたる合戦

に疲れ果て、矢も尽きてしまった。

夜半に城を捨てて逃げようと考え、義明を一緒に連れて行こうとした。しかし、彼が云うのに、「私は元々の源氏の家来として、幸せにも源氏再興のときに出会うことができた。年は既に八十を越えているので、余命は殆んど無い。いまこの老いたる命を頼朝に捧げ、子孫の手柄として残したいので、お前達は急いで頼朝様の消息を尋ねなさい。私は一人残つて多勢の軍勢のように見せかけ、川越重頼に見合つてやろうと思う」と。三浦次郎義澄以下は、いかにすべきかを悩みつつ、泣きながら、義明の命に従つて、無理やりに離れ分かれていった。

治承四年八月小廿七日丁未。朝間小雨。申尅已後。風雨殊甚。辰尅。三浦介義明（年八十九。）爲河越太郎重頼。江戸太郎重長等被討取。齡八旬餘。依無人扶持也。義澄等者。赴安房國。北條殿。同四郎主。岡崎四郎義實。近藤七國平等。自土肥郷岩浦令乘船。又指房州解纜。而於海上並舟船。相逢于三浦之輩。互述心事伊鬱云々。此間。景親率數千騎。雖攻來于三浦。義澄等渡海之後也。仍歸去云々。

〔大意〕八月廿七日、朝は小雨だったが、夕刻から風雨が激しくなった。午前八時頃、三浦義明（八十九才）は、川越太郎重頼、江戸太郎重長の軍に討ち取られた。三浦一族は、安房の國に向かい、また北條四郎時政主と義時、岡崎平四郎義實、近藤七國平達は、土肥の海岸から舟に乗り、同様に房総半島を目指して出航した。海上に舟を進めると三浦の一族と出会つたので、話し合つたという。この間に、大庭三郎景親は千騎の軍勢を引き連れ三浦に向かったが、義澄達は舟出した後だったので、自分の領地に帰つていった。

頼朝らは安房国に

石橋山の戦いで平家に敗れ、僅かな従者と共に山中へ逃れた頼朝は、数日間の山中逃亡の後、二十八日、真鶴岬から船出し、翌日房総に上陸した頼朝は、その地に勢力を持つ上総広常と千葉常胤に参上を命じ、房総半島を北上する。の頼朝をめぐる政治的な情勢は大きな変化をみせる。

伊豆から逃亡して約二十日後の九月十七日、彼は下総国府（現・市川市）に一万余の大軍を集め、武藏国への進出を狙う。さらに関東一円から多数の軍勢が集結して、歴史書の『吾妻鏡』によれば、三万騎の大軍団を形成していた。

当時関東とその周辺に拠点を構えていた数多の氏族たちのうちには、頼朝方はもちろん、平家方から頼朝方に移つたものも少なからず、また武田氏をはじめ、甲斐源氏はしばしば

平家を脅かした下図を参照)。

源頼朝は重長に参陣を命ずる

頼朝は十月初め武藏国に入ると、葛西清重、足立遠元らを従えた。ところが日の出の勢いの進軍を阻んだのは、下総・武藏国の間を流れる利根川(現在では江戸川・中川・隅田川へ入間川Vとなつている)であり、またその河口の水運を握つていた江戸重長、その人だった。

江戸氏は豊かな財力をもつていた・・・

中世の江戸の殷賑ぶりを伝える史料としてよく引かれる『義経記』には、利根川の下流であつた隅田川の様子が描かれ、江戸氏は「坂東八カ国の大福長者」と記されている。この書は軍記物として知られており、誇張のようではあるが・・・



群雄が割拠する関東周辺

5. 頼朝は江戸氏らを説き伏せる

一度は敵対した畠山重忠、河越重頼、江戸重長らをついにも従え、十月六日、かつて父義朝と兄義平の住んだ鎌倉へ入り、大倉の地に居宅となる大倉御所を構えて鎌倉を政治の拠点としたのである。

『吾妻鏡』には緊迫した情景が・・・

『吾妻鏡』巻の一(頼朝の旗揚げから鎌倉政権の樹立まで、九月二十八日条によると、

治承四年九月大廿八日丁丑。遣御使。被召江戸太郎重長。依景親之催。遂石橋合戦。雖有其謂。守令旨可奉相従。重能。有重。折節在京。於武藏國。當時汝己爲棟梁。專被恃思食之上者。催具便宜勇士等。可豫參之由云々。

「読み下し」治承四年九月大廿八日丁丑。御使を遣はし江戸太郎重長を召被る。景親之催しに依て、石橋合戦を遂げる。其の謂れ有ると雖も、令旨を守り相従い奉る可し。重能、有重は折節在京す。武藏國に於て當時は汝己に棟梁と爲す。専ら恃み思ひ食被る之上者、便宜の勇士等を催し具し、豫參す可し之由と云々。

「大意」頼朝は使いを出して江戸太郎重長を呼びつけた。大婆景親(一族は平良文の末裔で、桓武平氏の流れを汲む相模国の武將)に催促にされ、石橋合戦ではわれわれに敵対した。その

理由は分からないわけではないが、以仁王（後白河天皇の第三皇子。源氏に平家打倒の挙兵を促した）の令旨（皇太子の意を奉じた文書）を守つて私に従うべきだ。畠山重能（重忠の父）と小田山有重はたまたま大番（天皇の居所などの警備役）で京都に滞在しているので、武蔵国では、今、秩父氏一族一番の上位者であるそなたを頼りにしている。勇士を集め、当方の軍に参加してはくれまいか」と伝えたのである。

さらに、翌二十九日条によれば、重長が大庭景親に味方して、未だに來ないので、やはり追討すべきだとして、頼朝方に付いていた同じ秩父氏の葛西清重に対して、大井の要害に重長を誘い出し、討ち取るように命じている。

治承四年九月大廿九日戊寅。所奉從之軍兵。當參已二万七千餘騎也。甲斐國源氏。并常陸下野上野等國輩參加者。假令可及五万騎云々。而江戸太郎重長。依令与景親。于今不參之間。試昨日雖被遣御書。猶追討可宜之趣。有沙汰。被遣中四郎惟重於葛西三郎清重之許。可見大井要害之由。偽而令誘引重長。可討進之旨。所被仰也。江戸葛西雖爲一族。清重依不存貳。如此云々。

〔読み下し〕治承四年九月大廿九日戊寅。従い奉る所之軍兵、當參已に二万七千餘騎也。甲斐國の源氏並びに常陸、下野、上野等の國の輩、參加する者、假令五万騎に及ぶ可しと云々。而して江戸太郎重長、景親与与令む依て、今に參ぜ不之間、試に昨日御書を遣は被ると雖も、猶追討宜しかる可し之趣、沙汰有り。中四郎惟重於葛西三郎清重之許に遣は被、大井の要害を見る可し之由、偽はり而重長を誘引令め、討ち進ず可し之旨、仰せ被る所也。江戸、葛西は一族を爲すと雖も、清重は貳を存ぜ不に依て、此の如しと云々。試に昨日御書を遣は被ると雖も、猶追討宜しかる可し之趣、沙汰有り。中四郎惟重於葛西三郎清重之許に遣は被、大井の要害を見る可し之由、偽はり而重長を誘引令め、討ち進ず可し之旨、仰せ被る所也。江戸、葛西は一族を爲すと雖も、清重は貳を存ぜ不に依て、此の如しと云々。

〔大意〕治承四年九月大廿九日戊寅。頼朝への從軍は二万七千騎以上になり、さらに甲斐（山梨）の源氏と常陸（茨城）下野（栃木）上野（群馬）から参加してくるものはおおよそ五万騎にもなる勢いだ。ところが、江戸太郎重長は大庭三郎景親に味方していて、未だに來ない。そこで試みに手紙を出したのだが、しかし追討することに決めようと思う。中四郎惟重を葛西三郎清重の処へ行かせ、「大井川（太日川）の防衛を確かめよう」という嘘をついて江戸太郎重長を呼び出し、殺してしまえと命じた処だ。江戸・葛西は同じ秩父氏一族ではあるが、葛西三郎清重は二心の無い人物なので、このようにせよ、と命じたのだ。

*注：「假令」は、「おおよそ」の意。

ついに江戸氏が参上したので、数日後の十月四日の條では、

治承四年十月小四日癸未。畠山次郎重忠。參會長井渡。河越太郎重頼。江戸太郎重長又參上。此輩討三浦介義明者也。而義澄以下子息門葉多以候御共勵武功。重長等者。雖奉射源家。不被抽賞有勢之輩者。絆難成歟。存忠直者更不可貽憤之旨。兼以被仰含于三浦一黨。彼等申無異心之趣。仍各相互合眼列座者也。

〔読み下し〕治承四年十月小四日癸未。畠山次郎重忠、長井の渡しに參會す。河越太郎重頼、江戸太郎重長、又參上す。此の輩は三浦介義明を討つ者也。而るに義澄以下子息門葉、多く以て御共に候ひ、武功を勵む。重長等者源家を射奉ると雖も、有勢之輩を抽賞せ被不者、絆を成し難き歟。忠直を存ずれ者、更に憤を貽す不可之旨、兼て以て三浦一黨に仰せ含め被る。彼等異心無き之趣を申す。仍て各相互に合眼し列座する者也。

〔大意〕治承四年十月小四日癸未。畠山次郎重忠がようやく長井の渡しに参じてきた。川越太郎重頼、江戸太郎重長も一緒に参上した。彼らは三浦介義明を殺した人たちだが、一方の義澄以下子供たち一族は、多くは頼朝のお供として武勇の功を擧げている。重長達

は源氏に敵対し、その部下の三浦氏を討つたが、われが目的を達成するためには、大きな勢力をもつ秩父氏一族を味方にしないければならない。源氏に忠義を尽くすためには、恨みをもつてはいけなないと、前もつて三浦一族に言い聞かせておいた。三浦氏一同も異論はないと云っているので、お互いに目を合わせはしたが、同列に並んで座ることになったのだ。

*注：「長井の渡し」は現在の台東区橋場付近と推定されている（千代田区史）による。

参じた江戸太郎には・・・

治承四年十月小五日甲申。武藏國諸雜事等。仰在廳官人并諸郡司等。可令致沙汰之旨。所被仰付江戸太郎重長也。

〔読み下し〕治承四年十月小五日甲申。武藏國の諸雜事等、在廳官人並びに諸郡司等に仰せて、沙汰致さ令む可し之旨、江戸太郎重長に仰せ付け被る所也

〔大意〕治承四年十月小五日甲申。武藏國の労働奉仕は、全般について国衙の役人や郡衙の役人に対して指示するよう、江戸太郎重長に命じた。いわば褒章として、このとき重長は、実質上の国司代行権限を与えられたようだ。

6. 秩父氏一族のちから

このころ、川越から入間川（現・荒川）を通り、東京湾に至る川筋は、同族によって支配されていた。河越（現・川越）の河越氏のほか、武蔵国豊島郡の豊島氏、江戸湊と浅草を支配する江戸氏などは、入間川とつながる利根川水系の一部や国衙のある多摩川下流などにも勢力を伸ばし、現・葛飾区青戸にあった葛西城の葛西氏や、登戸の稲毛氏なども居館を構えていた。

水運を一手に掌握していた・・・

江戸氏が力を得た原動力は何だったのか、それは江戸に集まる河川の交通を通して蓄えたのではなからうか。以下、地誌を土台として考察してみよう。

中世の江戸は水運が盛んだった

入間川（現・隅田川）、利根川（後に鬼怒川流域に変流され、河口を銚子に付け替えられた）が流れ込み、武蔵国の北部の河川とも繋がって、江戸は水運の要めになっていた。

7. 「江戸前島」は・・・

本郷台地南端、駿河台につづく台地で、日本橋台地ともいわれ、海や川の浸蝕によって

削り残された微高地とされている。現在の千代田区大手町・丸の内・京橋・銀座を含む地域であるが、その付け根の辺りには平川と旧石神井川が流入して、河口付近には人や物が集まり、集落ができていた。

江戸前島の西側には「日比谷入江」（現・皇居外苑・日比谷公園・内幸町・新橋・浜松町を含む）が入り込み、現在の日本橋川と神田川の原型となった「平川」の河口となっていた。

また江戸前島の東にはもう一つの入江があった。「旧石神井川」の河口である。現在の石神井川は、板橋区の南部を流れて北区滝野川に入ると、溪谷状の川となり、JR王子駅の下を通過したのち隅田川に注いでいる。しかしかつては、飛鳥山西麓を経て、千駄木―根津―不忍池へと流れ、池ノ端―湯島―須田町―神田―日本橋堀留の流路によって、江戸前島東岸の海に向かっていった。

その一部は、近年まで谷田川（藍染川）の名で残っていた。この河口の辺りが「江戸湊」として繁栄したようだ。後世になっても港湾としての重要な立地が、近代の「東京港」に発展したともいわれ、中央区新川（*Shin-Kawa*）には、江戸時代（慶長年間）に幕府が開いた「江戸湊」の記念碑が建てられている。

一方、入間川河口の浅草や「浅草湊」は、『吾妻鏡』などでは独自の存在として、「江戸」

の外域として扱われていた。

金竜山浅草寺「寺伝」によれば・・・

推古天皇三十六年（628）、宮戸川（入間川の一部）で討った網で、黄金の聖観音像が引き上げられ、これを奉安した縁起は広く知られている。

浅草寺の北東に所在する待乳山は『真土山』（人工の盛り土ではない、自然の地層のやま）であることも知られ、浅草寺を中心とする一帯は、古来から、武蔵野台地東縁部分が川と海の浸蝕でわずかに残った微高地だった。海岸伝いにこの入江にたどりついた渡来人たちが、ここから武蔵国の内陸部へと進出したことも伝えられている。

8。江戸重長のその後・・・

江戸重長は頼朝に臣従し、文治五年（1189）七月～九月の奥州合戦に従軍したことが記録に残されている。

源頼朝は、平氏を滅ぼした後も兄に従わず、互いに不仲となった弟の義経を匿まつたという理由で、自ら奥州に兵を進め、ついに藤原氏を滅ぼした。奥州征伐とも呼ばれ、治承・

寿永の乱の最後の戦いとなつて、頼朝は全国を平定、武士政権を確立したのである。

『吾妻鏡』の記述では、「奥州征伐」と呼ばれている。同書の第九卷に、

「読み下し」文治五年（1189）七月小十九日丁丑。已尅。二品奥州の泰衡を征伐の爲、發向し給ふ。中略、御進發の儀、先陣は畠山次郎重忠也。先ず疋夫八十人馬前に在り。五十人は人別に征箭三腰（雨皮を以て之を袋む）を荷い、三十人は鋤鎌を持た令む。以下省略

凡そ鎌倉出の御勢一千騎也。次に御駕。（御弓袋差。御旗差。御甲着等。御馬前に在り。）

鎌倉自り出御の御供の輩として豊嶋権守清光、葛西三郎清重、同十郎、江戸太郎重長、同次郎親重、同四郎重通、同七郎重宗・・・の名前が記されている。

その後、建久六年（1195）三月、江戸重長は、東大寺落慶供養の頼朝上洛に供奉する。供奉人行列 先陣

畠山二郎、和田左衛門尉（各不相並）次御隨兵（儀仗兵）〔三騎相並び。各、家子、郎従同じく甲冑を着け。路傍に列す。其の人数合期（家格）に随う所也。〕

江戸太郎、大井次郎、品河太郎、豊嶋兵衛尉、足立太郎、江戸四郎 以下省略

9. 江戸氏の時代は三百年か？

江戸氏が『吾妻鏡』に初出したのは治承四年、この年から数えると、扇谷上杉氏、上杉持朝の家臣だった太田道灌が、江戸館を奪って、大掛かりな江戸城を新たに築城した年、すなわち長祿元年（1457）まで、277年もの年月となる（江戸氏は勢力が衰えたので、実効支配は250年ともいわれるが）。

江戸氏一族が江戸郷で活動し始めたのは、歴史に現われる以前のことに違いないので、その年月は三百年を越えることは確かだ。正史には、長年にわたる活動の片鱗しか残されていないのである。

一族はそれぞれの運命を辿った・・・

河越重頼、畠山重忠は、鎌倉幕府初期のころ、内部の勢力争いによつて滅ぼされた。それに対して、江戸重長は江戸氏一族の重鎮として鎌倉幕府に仕え、子孫も繁栄した。

ただし、惣領の重長以後は多くの系統に分かれ、江戸周辺の各地域を領有しながら散つていった。そ



江戸重長像（喜多見の慶元寺）

のため惣領家の求心力は弱体となり、次第に力を失わない、江戸氏の城館は荒廃したようだ。

鎌倉幕府、北条氏が滅亡して・・・

江戸氏のみならず、惣領制の解体が一般的となつて、鎌倉武士団の基本が崩れ、鎌倉幕府と代わつた後醍醐天皇の建武の政府も、変容する武士階級の要求に応えることができず、ついに南北朝の内乱に突入する。

北朝に参じた江戸氏・・・

南北朝時代になると、多くの武藏の武士は北朝方の足利氏の麾下に参じたが、足利氏の内訌（うちわもめ）があつたので、武士団の動揺は隠せなかつた。江戸氏は南朝側の新田義貞に従つて南朝方につき、後に北朝に帰順して鎌倉公方に仕えた。

江戸太郎重長公

重長は始祖重継の子で江戸氏二代目である。江戸の地に居を構え周辺を領有していた。再起した源頼朝の武蔵入國に助力した功により武蔵國諸雜事、在庁官人並びに諸郡司を仰せ付けられ、更に源平合戦、奥州征伐等に参戦鎌倉幕府樹立に尽力し右兵衛尉に任ぜられ武蔵七郷を賜つた武将である。嘉祿元年八月十二日歿。

文治二年、父の菩提のために江戸館地の紅葉山に建立した東福寺が慶元寺の前身である。

当山開基八百年に当り、江戸太郎重長顕彰報恩の意を以つてこの像を建立す。

昭和六十年十一月三日

願主永劫山慶元寺 第三十二世道譽元鏡

武蔵野合戦のころ

正平七年（1352）、南朝側の新田義興（義貞の子）と足利尊氏とが激突した。尊氏が没した半年後、延文三年（1358）、尊氏の子で鎌倉公方だった足利基氏と、関東管領の畠山国清によつて送りこまれた竹沢右京亮（江戸氏の一族といわれる）と江戸遠江守高良により、義興と主従十三人は、多摩川の矢口渡で謀殺される。江戸氏は、この新田義興謀殺は「きたなき男の振る舞いだ」とされて人望を失ったという。

つづく平一揆で敗退・・・

応安元年（1368年）、初代関東管領で、山内上杉家の始祖だった上杉憲顕が上洛した隙を狙い、武蔵国の平一揆（支配体制に対して、ときには武力をもってする抵抗運動を一揆といい、武蔵平一揆は、武蔵国で関東管領上杉憲顕に対して起こした反乱）が蜂起した。河越直重を大将に、一族の江戸氏や、村山党の仙波氏など地元（こども）の武士が居城の河越館に籠り、江戸牛島（現墨田区）には別働隊を置いた。これにより、秩父氏一族が支配する人間川（現荒川）を河越から江戸まで封鎖し、鎌倉街道を寸断して、鎌倉府と憲顕の本拠地上野国の交通を絶つたと推定される。

上杉憲顕はすぐには帰国せず、幕府を味方に付けた。関東管領を継いだ甥で婿に当る上杉朝房は、基氏の後を継いだ足利氏満（当時十才）を擁して河越に出陣し、憲顕や武田氏・葛山氏らの軍勢の動員もあつて、同年六月の河越の合戦によつて反乱は鎮圧された。

江戸氏一族は武蔵平一揆で敗退したのちは衰退に向かう。

10. 江戸前島と鎌倉円覚寺文書

すでに述べたように、「江戸前島」は、江戸の地誌、水利を語り、また江戸の街づくりでは、その核心となつた地域で、現在では、繁華な東京下町を構成している。しかし、「江戸前島」がはじめて史料に現われ、確認されたのは、源氏の頼朝が武蔵国に上陸した年から八十一年後になつてからであつた。

弘長元年（1261）十月三日付けの「関興寺文書」が知られている。この書状は現在、新潟県南魚沼市上野に所在する同寺に保管されている。最近、同書の複製が千代区日比谷図書館によつて作成され、同所に常設展示されている。

平長重から五代右衛門尉にあつた文書で、「武蔵国豊島郡江戸郷之内前嶋村は先祖の所領に相伝仕候し処に此両三年飢饉之間百姓一人も候はず」とある。

発信したのは、平家から出た江戸氏一族の一人、地頭江戸長重で、「正嘉の飢饉」による荒廃で経営が出来なくなった前島村（現在の東京駅周辺）を北条氏得宗家に寄進してその被官（守護に従属する国人領主）となったという。

さらに、正和四年（1315）には、江戸前島が鎌倉の円覚寺の所領になっていたことを示す文書（『円覚寺文書』）として『鎌倉市史』にその詳細が掲載されている）の存在が確かめられた。得宗家から円覚寺に再寄進されたことの記録である。

円覚寺は、弘安五年（1282）に北条時宗が宋からの渡来僧を開山として建立した寺で、中世から建長寺に次ぐ、鎌倉五山第二位の寺として知られる。文書の中には北条、足利歴代將軍の名前も現われ、ときの権力者が寄進した荘園や、領主の所領の大部の記述がみられる。寺領の大きさ、ときの権力者からの優遇は、特別なものであった。

11. 職能集団だった江戸氏

源頼朝に下った江戸氏は、既述したように、幕府の要人として活動することはなく、『吾妻鏡』を見る限りでは、急速にその姿を消したようである。

しかし、都市の歴史家として知られている鈴木理生は、「江戸は中世のころから都市的な状況、すなわち人・物の交流の場をもっていた」と考え（『幻の江戸百年』筑摩書房刊／1991）、江戸氏をつぎのように評価している。

彼は利根川水系の産業を支え、河口部の舟運や、他地域との海運業務を運営する「いちば」の専門的な商人集団だったようだ。したがって幕府は江戸氏を一拳に滅ぼすことはせず、再配置もせず、彼らの職能を利用することに徹したのではあるまいか。

12. 江戸を奪取した太田道灌の記録は語る・・・

つけ加えるならば、江戸のまちと、江戸城を奪取して、占拠した太田道灌は、前島一帯の繁栄、特に水運のもたらす富を魅力として、当初に館を構えた「品川湊」から「江戸湊」へと乗り込んだようだ。

太田道灌が、鎌倉五山の詩僧や都から招いた詩人の「万里秀九」に依頼して、江戸城の楼閣に掲げた「詩板」の記録は、今もほぼ完璧に残存していることは、実に幸いなことといわざるを得ない。

「詩板」に記された詳細は、稿を改めて述べる予定である。

13. 江戸氏の菩提寺は喜多見へ

現在の皇居東御苑に本拠を置いて江戸宗家を中心に、ほぼ現在の東京二十三区全域に広がった支族・庶流の名前は、いまもつぎのように、現在の地名に残されているのである。いくつかを列挙してみよう。

十三世紀の半ばには、

江戸氏家（木田見次郎・・・世田谷区喜多見）、家重（丸子三郎・・・大田区・川崎市丸子）、冬重（六郷四郎・・・大田区六郷）、秀重（飯倉六郎・・・港区飯倉）、元重（渋谷七郎・・・渋谷区渋谷）

十五世紀になると、

中野殿（中野区）、阿佐谷殿（杉並区）、桜田殿（千代田区または港区）、石浜殿（台東区）、牛島殿（墨田区）、こび鈍度の（文京区）・・・

喜多見村に移る・・・

「喜多見」は、昭和初期までは東京府下北多摩郡「砧村」喜多見と称していたが、江戸時代は「喜多見村」であった。江戸郷を治めていた江戸氏が、太田道灌によって追われて隠れ住んだのがこの地であり、江戸氏の名前も変え「喜多見氏」と名乗るようになったよ

うだ。

喜多見氏は徳川家康に召し抱えられ、以後累進して二万石の大名にまでなるが、元禄時代に刃傷沙汰を起しお家断絶となってしまった。

14. 「江戸氏」の菩提寺は慶元寺

世田谷区喜多見四丁目に所在。鬱蒼とした森に覆われており、静寂な場所である。山門の脇に立てられている世田谷区教育委員会の掲示板によれば、

当寺は、文治二年（1186）三月、江戸太郎重長が今の皇居紅葉山辺に開基した江戸氏の氏寺で、当時は天台宗であった（現在は京都知恩院の末寺）。

室町時代の中ごろ、江戸氏の木田見（今の喜多見）への移居に伴って氏寺もこの地に移り、その後、浄土宗に改め永劫山華林院慶元寺と改称した。さらに文禄二年（1593）江戸氏改め喜多見氏初代の若狭守勝忠が再建し、元和二年（1616）には永統資糧として五石を寄進し、また、寛永十三年（1636）には徳川三代將軍家光から朱印状を賜った。

現本堂は享保元年（1716）に再建されたもので、墓地には江戸氏、喜多見氏の墓があり、本堂には一族の霊牌や開基江戸太郎重長と寺記に記されている木像が安置されている。



本堂の正装スタイル
 工戸『風の旅人』より引用



江戸太郎重長公の像と位牌
 工戸『風の旅人』より引用



江戸氏代々の墓



慶元寺の参道 杉並木がつづく



慶元寺の墓地 江戸氏代々の墓は、三重塔
 (平成五年建立)の手前、左側に在る

マイクロCOMからスマートフォンへ PCの展開1/3世紀を語る

いま使われているコンピュータは・・・

演算を行なうためのプログラムをメモリ（記憶装置）に格納し、そのプログラムに従ってCPUが演算を実行するもので、「ノイマン型」といわれる。プログラム（ソフトウェア）を書き替えることによって、同じハードウェアを使用しつつ、異なる仕事をさせるという機能をもっている。

CPUはコンピュータの心臓部

コンピュータが処理する中心部分の電子回路をCPUという。Central Processing Unitの略称で、その高性能化がコンピュータの進歩・普及を牽引してきた。左下の図に示すのは、CPUの集積度の変遷であるが、その急角度の上昇は驚異的といわざるを得ない。

い。この図には、CPUのトップ企業、インテル社の製品名を表示した。

クロック速度を予測するムーアの法則によれば、最大値に近付いていることにも注目したい。今後の進歩は、全く新しい理論・技術の展開にかかっているようだ。

コンピュータがパーソナル仕様に

マイコン（マイクロ・コンピュータ）が家庭や事務所、そして日常の暮らしの中に溶け込み、身辺に携帯されるまで、ほぼ1/3世紀が経過した。ここでは、その歩みを振り返りつつ、次の飛躍へのステップを見据えることにしたい。

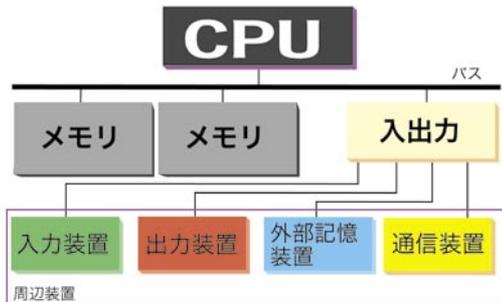
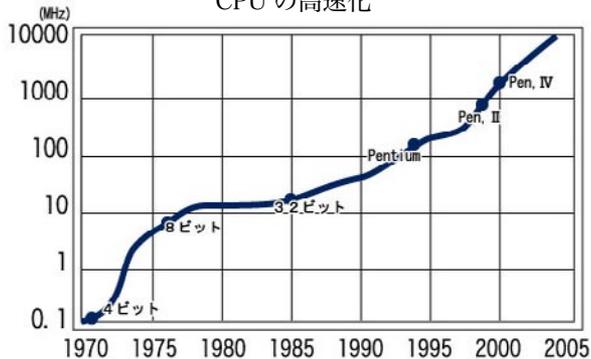


ジョブズの実家
アップルはそのガレージで創業した



ジョブズ
スティーブ・ジョブズ

CPUの高速化



▶1970年代▶

アメリカでは・・・

1970年 青い巨人 (Big Blue) と呼ばれ、コンピュータ産業を独占していた IBM (Intl Business Machines Corp.) は、8ビット卓上型を開発した。

1975年 それに対して、ホームコンピュータ市場への参入を決断したステイブン・ポール・ジョブズ (Steven Paul Jobs、1955年2月24日〜2011年10月5日) は、実家のガレージでアップル社を創業。愛好家のために、ホームコンピュータ「Apple I」を開発、1977年に発売 (200台) した。しかし完売できなかつた。

つづいて後継の Apple II を発売すると、このときは爆発的な人気を得、大量生産の道が開かれたので、アップル社はその基礎を築くことができた。

日本では・・・

1976年 日本電気 (NEC) がワンボード・マイクロコンピュータ (マイコン) TK-80 を発売。

TK は Training Kit μ COM の略で、マイコン・システム開発のためのトレーニング

キットである。NECの半導体事業部 (現在のルネサスエレクトロニクス) は、その数年後には改良型の TK-85 を発売した。

1979年 日本電気 (NEC) はキーボードと本体が一体化した PC8001 を発売。5月に発表され、9月販売開始。定価は168,000円だった。

ほぼ同じ頃、シャープ社は MZ シリーズを発売。

1978年 MZ-40K (4ビットマイコン・トレーニングキット)、つづいて8ビットの MZ-80T (ワンボードマイコン) へ。

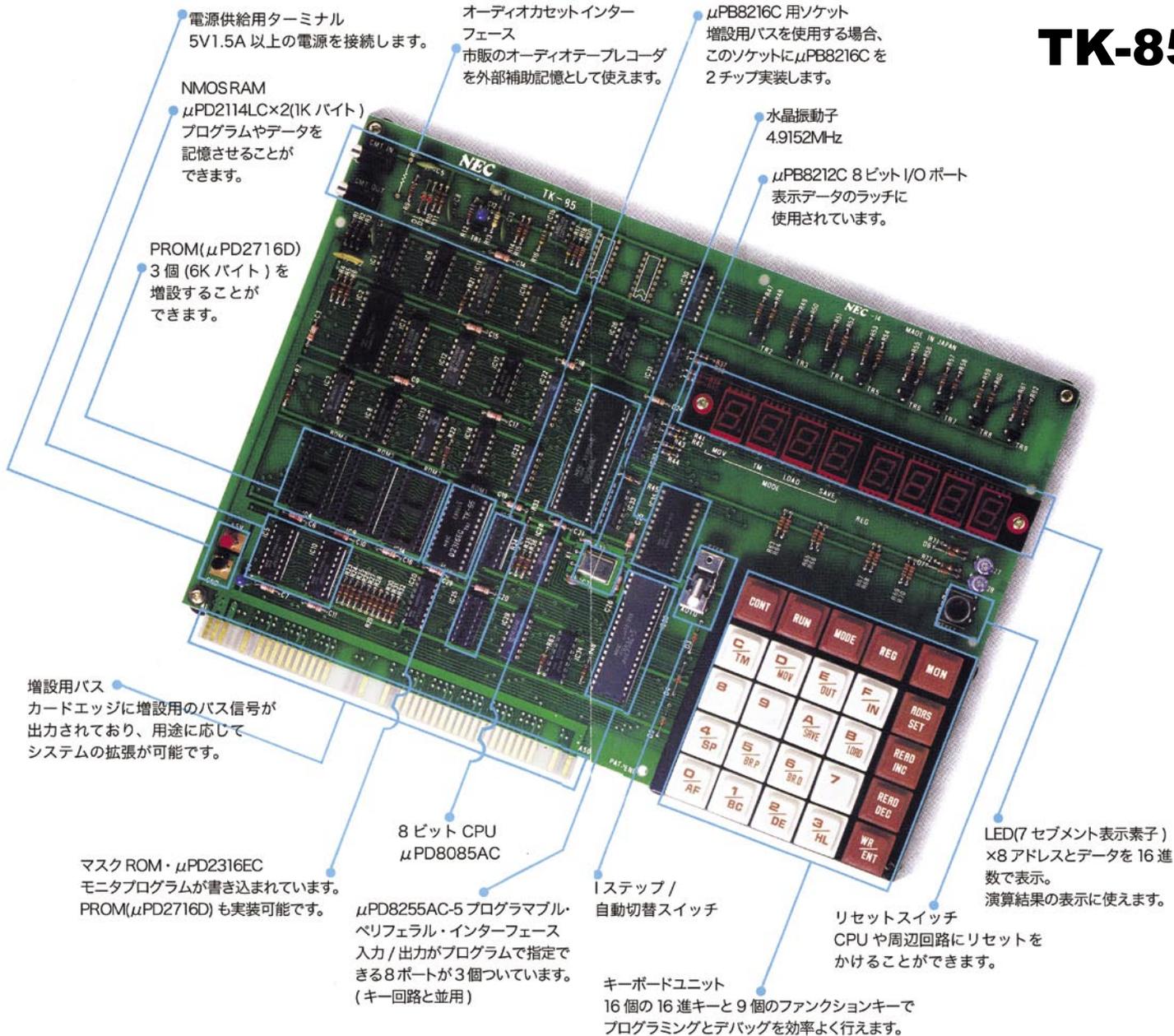
▶1980年代▶

1981年 NEC は、8000 シリーズの上位機種 8800 を発売、さらに翌年、矢継ぎ早に、16ビットの PC-9000 シリーズを発売、漢字、仮名の表記、ワープロ機能をもち、本格的な汎用型 PC の先駆となった。

パーソナルコンピュータとは・・・

個人によって占有され、使用されるコンピュータ (Personal computer) で、わが国では通称を「パソコン」という。PCは個人向けの大きさ・性能・価格をもち、エ

TK-85



Personal Computer PC-8000 Series

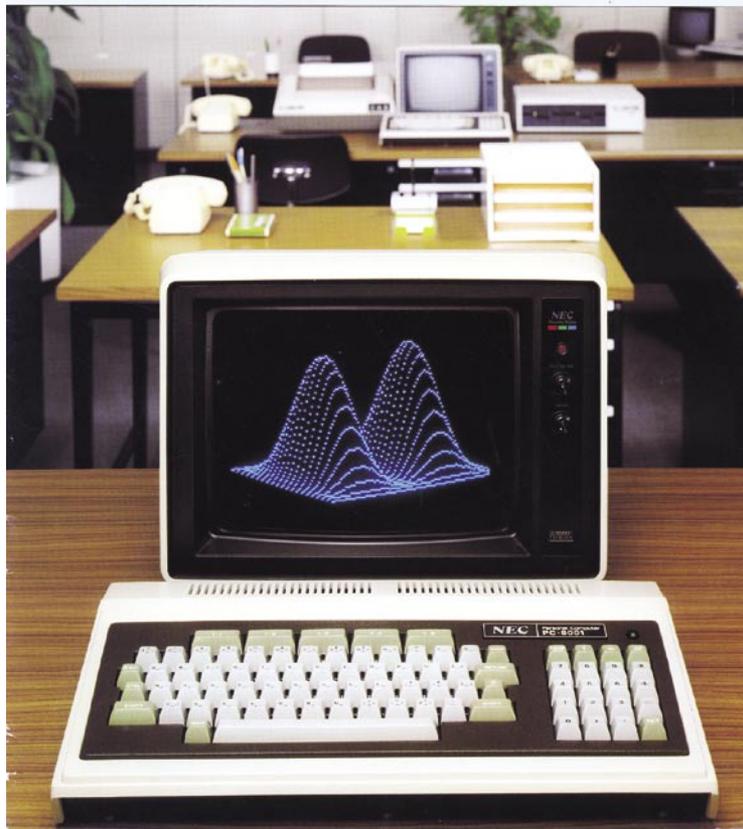
NEC



パーソナルコンピュータ PC-8000 シリーズ

NEC

高性能・低価格化を実現



ンドユーザーが直接操作できる汎用的なコンピュータである。
はじめは「デスクトップ」型だったが、小型化したノートブック型としてあまねく普及した。アーキテクチャーはほとんど同じである。

ノート型のノートPC（英語では、laptop, notebook, notepad computer）は、モニタなどの表示画面、キーボード、入力装置などが本体と一体化され、ユーザーが持ち運ぶことを前提として設計された二つ折り・軽量のものを指す。

1989年7月、東芝はA4ノートサイズ、2.7kgと軽量で、最小限のインターフェイスを装備しながら、大きい液晶ディスプレイを備え、デスクトップタイプのパソコンと互換性をもつ、DynaBook J-3100SSを発売、198,000円という安い価格は衝撃的だった。

発表したのは、エプソンのノートPCが先んじていた。遺憾ながら価格で競合にならなかった。1989年10月にはNECからPC-9801nが発売され、「ノートパソコン」という新たな市場が切り開かれた。

▶1990年代▶

米国では1991年に、アップルコンピュータがPowerBookシリーズの発売を開始、キーボードの手前にパームレストとポイントインテイクデバイス（当時はトラックボールだったが、ついでマウスが導入される）を配置、現在のノートパソコンのデザインの原型となった。またThinkPad (IBM/Lenovo) は独自のトラックポイントを採用した。インターネットの商用化へ

1991年から1994年にかけて、わが国では電話回線網が整備され、インターネットが普及し始めた。

ただし見落としてはならないのは、それ以前に開発された「草の根」ネットワークや大学間・ネットワークの構築などである。国内でも、ネット基盤は築かれていたのである。

以下は私、本紙編集担当の個人的な経験である。前記したNECのPC-9001を自宅に設置し、電話線とモデムを使って、1989年から、「草の根」ネットワークを構築して、多くの友人たちとのコミュニケーションを楽しんだ。翌年、たまたま私は全国規模の集会（日本薬学会二二年会）の組織・運営を任されたので、このシステムを本格的に使用するチャンスに遭遇した。ここで、日本語・英語の講演要旨をネット

上で受付け、まだ活字を拾っていた印刷システムに、デジタル印刷を導入、短時間で、数千ページに及ぶ講演要旨集（ブックレット）を制作した。和文処理として最初の事例を成功させることができた。

2000年代V^2010年代V

PCは64ビットの時代となり、コモディティ化によって、製品メーカー間の特徴は希薄となる一方、利用形態は多様化した。ノートパソコンが市場の主流になって、無線LANによる無線接続も一般化してゆく。近年のPCの利用については、あまりにも身近になってしまったので、以下、駆け足でその概略を辿ることにしよう。

携帯電話端末の普及

トランシーバー（無線電波の送受信機）と電話とが融合し、2000年代に入ると、第三世代の携帯電話が登場、PCと接続して高速のデータ通信が行なえるようになった。携帯情報端末、または個人情報端末として、スケジュール、住所録、メモなどの情報を携帯して扱うための小型機器、マルチメディア端末となり、PDA (Personal Digital Assistant(Personal Data Assistance)) というコンセプトが生まれた。

タブレット端末と無線LAN、そしてスマートフォンが登場

2001年11月、アップル社が開発・発売した携帯型デジタル音楽プレイヤーのiPodは、本体に搭載されている記憶装置に数百から数万曲の音楽を保存することができ、爆発的な人気を博して世界的な規模で普及した。

同社は「スマートフォン」の魁けとして、携帯電話のiPhoneを発売、2010年1月には、タブレット（平板）型で、液晶画面に指先をあてながら操作する「タッチパネル」を採用した、iPadを発表、動画、電子書籍、ゲームなど数多くの機能が盛り込まれた。インターネット、電子メールには、電話接続のほか、Wi-Fi（無線LAN）が利用できる。

スマートフォンやタブレットPCなどの携帯情報端末を主なターゲットとして、オープンソースのプラットフォーム、Android（アンドロイド）が開発され、携帯用個人情報機器の人気は一途に上昇中のようだ。

サンバパレード（大通り）



地域のニュース&ギャラリー

いろは市 第26回チャリティー
 ところ…志木市本町通り(1〜3丁目)
 とき…平成24年8月26日午後1時〜6時
 東日本大震災復興支援



オープニング 志木中学校吹奏楽部の演奏



大宮アルディージャ/キックターゲット



オープニングサンバ（かわしん前）

「市民フォーラム」の活動

「市民フォーラム」は、地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。

また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

地域情報紙「市民プレス」は「市民フォーラム」が編集、発行し、無料で配布しています。

読者の「オピニオン」（意見・感想）をお寄せ下さい。

TEL090 (3048) 5502

編集部 原宛にどうぞ

本紙「市民プレス」は年四回（一、四、七、十月、各五日）発行